

課題対応取組み報告書

名称	城陽地域包括支援センター
提出日	令和 6 年 6 月 11 日

カテゴリー (※主なものをひとつチェック)	<input checked="" type="checkbox"/> 地域や専門職とのつながり等 <input type="checkbox"/> 認知症高齢者等の支援 <input type="checkbox"/> その他 ()	<input type="checkbox"/> 社会資源の創設 (居場所づくり等) <input type="checkbox"/> 自立支援・介護予防・健康づくり等
活動テーマ	複合課題への対応のための各関係機関との連携強化と地域との関りの強化	
地域ケア会議から 見えてきた課題	①地域や家族からも孤立傾向や、高齢者またはその家族にも障がいがあるなど、世帯単位での支援が必要となっている。 ②認知症や精神疾患、障がいや生活困窮、金銭管理など、複合課題ケースへの対応が増えている。 ③新型コロナウイルスの影響により、地域や住民との交流機会が減少し、情報の発着信や周知・啓発活動機会も減少した。	
対象	地域住民及び関係者、介護サービス事業者、ケアマネジャー	
地域特性	【嶋野地域】 駅やスーパー、病院などが多く、城陽圏域内での人口の約45%を占める。新たに209戸のマンションも建設中で人口増加が見込まれる。市営住宅等がある地域の高齢化率は38%と高い。コロナ後は「しぎのカーニバル(夏祭り)」や地域住民の助けあい活動を立ち上げたり地域活動も活発。 【城東地域】 主に鉄道の駅を中心に社会資源も集中しており利便性が高いが、駅から離れるにつれ旧家屋も多く買い物や通院に不便なエリアがあり、移動スーパーとくし丸が運行している。 【中浜地域】 地域防災に力を入れている地域で、住民から防災士も数名輩出。地域のつながりは強く、近隣住人からの相談も多数ある。介護にかかわる社会資源は他地域に比べ乏しい傾向。 【森之宮地域】 高齢化率は38%と高い。地域のつながりが無い高齢者も多く、孤立しやすい環境であるが、UR公団、行政、介護、医療などの関係者からなる協議体の様々な取り組みや、サロンや寺子屋など孤立防止の地域活動もある。	
活動目標	<ul style="list-style-type: none"> ・多様化する地域の課題に対して、多角的に対応できる多職種多機関の円滑な連携と支援体制を構築できる。 ・早期相談に繋がる関係の構築。地域活動協議会、アクションプラン、各地域のイベントや取り組みに参加し、より身近な相談窓口として認知される。 ・感染症等により社会との繋がりが持ちづらくとも、個々で情報の発着信が行える。 	
活動内容 (具体的取組み)	課題①及び②に対する活動 <ul style="list-style-type: none"> ・障がいフォーラムの継続開催：継続開催7年目。参加者55名。世帯単位への支援、高齢と障がいの世帯における金銭管理や権利擁護など、複合課題へチームアプローチで適切に対応できる体制構築を目的とし地域、多職種・多機関で事例を通じた講習、グループワークで関係性を深めた。 ・出張相談会の開催：毎月1回、医療ビル内ギャラリースペースで通院される高齢者や家族介護者にアプローチを行った。 ・認知症の理解を深めるため区民を対象に「認知症フェスタ」を区内4包括を中心に開催、町会向けの勉強会も開催した。 ・認知症予防活動の一環として「マイナス5歳プロジェクト」を継続(6年目)開催した。 課題③に対する活動 <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍により、情報難民やフレイル状態に陥りやすい傾向にある地域住民に対し「スマホ教室/健康測定会」を大阪公立大と6月と10月に2回共催した。 ・地域で開催される地域活動協議会、町会長会議、アクションプラン、森之宮孤立防止ネットワーク会議等の諸会議や新規のサロン、思いやり喫茶、百歳体操、など再開された地域活動に積極的に参加した。 	
成果 (根拠となる資料等があれば添付すること)	①及び②の成果 障がいフォーラムを継続開催することで、多様な専門職や地域の支援が交代していても、複合課題に対して円滑なチームアプローチで支援が行えるように、地域・行政・専門職の顔が見え、それぞれの役割が分かる関係性の構築が研修やグループワークを通して行えた。出張相談会でアウトリーチの活動を行い、相談窓口として包括の周知に努め、早期介入ができる環境の整備を行なった。認知症フェスタを区内4包括を中心に開催し、体験型ブースで参加者自らが感じ取ることで、講演会とは違った形で認知症理解の促進ができた。マイナス5歳プロジェクトの継続開催により、地域住民の介護予防や自立の意識強化が進められた。 ③の成果 2年連続でスマホ教室/健康測定会を実施。高齢者の携帯スキル(情報取得技術)向上を支援し、LINEを利用した情報提供が可能な環境を整備した。 活動が再開された地域に積極的に出向き、地域包括支援センター(以下「包括」という)の周知を行うとともに、地域の支援者との関係を再構築し、新しい集いの場「オレンジサロンもりまち」の立ち上げから携わり運営に繋げることができた。	

<p>今後の課題</p>	<p>コロナ禍後の地域活動が再開されつつある半面、すべて元通りになってはならず、加えて地域活動における後継者不足はどの地域にもみられており、地域の集いの場や活動の継続に注視し、受け皿不足とならないように包括として可能な支援の継続を図る必要がある。</p> <p>8050問題を代表する複合型の支援困難ケースはチームアプローチによる解決が図れるよう、各関係機関や地域との関係性の強化は継続して行う必要がある。また重度化防止のため早期介入のための出張相談などのアウトリーチの活動も継続的にやっていく。</p>
<p>※以下は、区運営協議会事務局にて記入</p>	
<p>区地域包括支援センター 運営協議会開催日</p>	<p>令和6年7月4日(木)</p>
<p>専門性等の該当 (※該当個数は問わない)</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 地域性 <input checked="" type="checkbox"/> 継続性 <input type="checkbox"/> 浸透性・拡張性 <input checked="" type="checkbox"/> 専門性 <input checked="" type="checkbox"/> 独自性</p>
<p>評価できる項目（特性） についてのコメント</p> <p>* 今後の取組み継続に向けて、区地域包括支援センター運営協議会からの意見等を記載。</p>	<p>障がいフォーラムを継続開催することで、多様な専門職や地域の支援が交代していても、複合課題に対して円滑なチームアプローチで支援が行えるように、地域・行政・専門職それぞれの役割が分かる関係性の構築が研修やグループワークを通して行えたこと、認知症フェスタを区内4包括を中心に開催し、体験型ブースで参加者自らが感じ取ること、講演会とは違った形で認知症理解の促進ができたこと、活動が再開された地域に積極的に出向き、包括の周知を行うとともに、地域の支援者との関係を再構築し、新しい集いの場「オレンジサロンもりまち」の立ち上げから携わり運営に繋げることができている。</p>